

2015 冬 奥秩父主脈大縦走



霧氷と雲取山

記録 福澤 卓三

日時：2015年12月13日(日)～17日(木)

メンバー：L福澤卓三、鈴木輝明、田中利美

コースタイム：

12月13日(小雨のち曇り)

蕨崎(9:18)－瑞牆山荘(10:30)－富士見平小屋(11:50)－大日小屋(13:00)

－金峰山小屋幕営地(16:40)

12月14日(曇りのち晴れ)

幕営地(6:30)－金峰山(7:20)－大弛小屋(10:00)－前国師岳(12:30)－国師ヶ岳
(12:50)－東梓1ピッチ手前の幕営地(16:50)

12月15日(晴れ)

幕営地(5:30)－甲武信ヶ岳(10:00)－甲武信ヶ岳小屋(10:30)－破風山避難小屋(12:45)－東破風山(15:00)－雁坂峠(17:00)－雁坂峠小屋(17:30)

12月16日(晴れ)

雁坂小屋(5:00)－水晶山(6:55)－雁峠(10:10)－笠取山(10:40)－唐松尾山(14:15)－将監小屋(16:40)

12月17日(晴れ)

将堅小屋(4:20)－飛竜山分岐－三条ダルミ(12:20)－雲取山(13:00－13:50)－小雲取山－七ツ石山－鴨沢(18:20)－留浦(20:00)－奥多摩(20:35)

12月13日(日)

蕪崎からタクシーで瑞牆山荘に入った。運転手さんが今年は雪が少ないと言っていた。霧雨が降っているので雨具を着た。瑞牆山を目指す軽装備の家族連れがいて、小屋の主人に何か注意されていた。こちらも心配になり一言声をかけたが、途中で引き返すと言っていた。ほかに登山者はいない。登山者カードを提出して出発。瑞牆山荘の正面から、穏やかな登りの樹林帯の中、1ピッチで富士見平小屋平に到着。さらに1ピッチ登って行くと大日小屋にでる。



富士見平小屋(1814m)



大日小屋(2430m)

大日小屋からは登りがきつくなり、1㎡位の残雪がところどころにある。大日岩の基部を回り込むように登って行き、急な登りの途中で若い外国人の男女に会った。

(このあと、登山者に会ったのは甲武信ヶ岳で一人、雲取山で三人に会ったのみである。)

雪がこのあたりからべったりついている。ここから尾根に出て岩場が出てくる。山梨側がスパッと切れているところが出てくる。山頂を目指して登って行くと、金峰山小屋への分岐にでる。今日の幕営地に決めていたので、頂上を下をトラバースして金峰山小屋にむかった。以外に距離が長く、明日の朝、頂上まで時間がかかるなど思いながら暗くなる前に小屋に着いた。



金峰山小屋

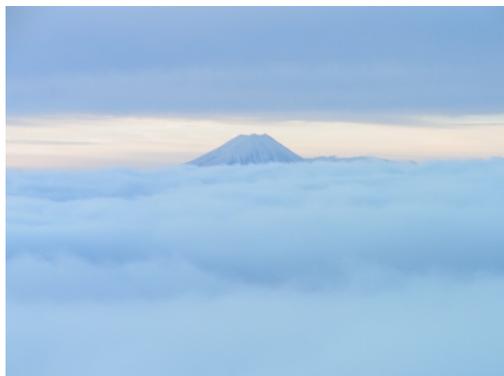


小屋近くのテント場

テントを何張りも晴れる場所は無かったが、小屋の近くに良い場所があった。小雪の中テントを張っていると暗くなった。夕食はとんかつである。生卵を3個持ってきていてびっくりした。

12月14日(月)

早朝雪面が氷っていると思いアイゼンをはいて、キャップライトをつけて出発。アイゼンがしっかりきいて装着してよかった。1ピッチ行かないうちに、明るくなりキャップライトはいらなくなる。小屋から50分で頂上についた。おおきな石が重なり合って転がっている狭い頂上である。見晴らしは良いが、奥秩父の名峰金峰山の頂上としては少しさみしい。



金峰山からの富士山



金峰山(2595m)

ここからは、朝日岳をめざして、おだやかでゆったりとしたひろい稜線を下る。視界が悪い時はルートファインディングに苦労しそうである。下ってから朝日岳へ登り返し、朝日峠を通過して、2つほど小さなピークをこえて、下りきると、金峰山から2ピッチ半で車道に出た。大弛峠である。大きな駐車場があり、車道の少し奥に大弛小屋があり、右奥の小屋の下に沢が流れている。



大弛小屋(2365m)



大弛峠駐車場



国師ヶ岳(2592m)

ここから国師ヶ岳への、木の階段にはまいった。10mほどの階段が20か所あったらだろうか、確かに足元は悪く階段が必要であるが、とにかくうんざりした。前国師ヶ岳をすぎて、北奥千丈岳(2601m)への分岐で、この先にも、この奥秩父最高峰へ行くルートがあると思ったがなかった。登れなくて心残りである。国師ヶ岳はここから20分ほどである。国師ヶ岳をすぎると、長くて急な下りを、いやになるほど、ひたすら下る。これをのぼりなおすのかと思うと憂鬱である。

国師ノタルの標識を見た時は、とっくに過ぎたと思っていたのがっくりした。東梓をめざしたが、この先、樹林帯が続き、よいビバークサイトがないことが予想され、暗くなる前によい幕営地を探しながら歩いた。登山道に広いスペースがあったので、登山者がいないこともあり、暗くなる前に登山道に幕営した。

12月15日(火)



今日もキャップライトをつけて出発。昨日なかなかつかなかった東梓(2272m)に1ピッチでついた。その先1ピッチで樹林帯の中に富士見(2373m)があった。手前のピークをすぎ、大きな急登のピークを詰めていくと標識が見え、甲武信ヶ岳(2475m)に到着。展望がすばらしい。甲武信小屋へ下って行くと、単独の登山者にあった。



国師ヶ岳と金峰山(甲武信ヶ岳から)



甲武信小屋

小屋の少し先に木賊山(2469m)に行く道とまき道があり迷ったが木賊山に登った。笹平に向かって下って行くと視界が開け立ち枯れや倒木、笹、石ころがでてくる。サイノ河原と呼ばれているところが出てくる。立ち枯れの木があるからだろうが、そんな雰囲気はある。



破風山避難小屋



東破風山(2260m)

急登でまだかまだかと思わせぶりの西破風山(2318m)、東破風山(2260m)をすぎ、なだらかな樹林帯を登り、雁坂嶺(2289m)をガンガン下って行くと雁坂峠(2082m)である。すでに暗くなりかかっている。水がないことから雁坂小屋まで下ることにする。キャップライトをつけて30分で小屋に着いた。しかし水場は遠く、夕食・朝食は行動食ですまそうかと思ったが、屋根に積もった雪が落下していたので利用した。計画はテント泊であるが、行程は遅れ気味で、朝の撤収など考えて小屋に入った。身体の自由がきき、装備の整理ができ、小屋の快適さは、テント生活をしたものでないとわからない。雪を溶かし、ゆっくり夕食の支度をした。小屋は二階建てで、素泊まりは2000円である。食事を作っている時に、首にアンテナを付けた犬が飛び込んできた。小屋の主人の猟犬で3日前の狩りの途中で迷ってしまい、我々を察知して小屋にきたのだ。小屋に張ってある電話番号に電話した。小屋の主人が3時間弱で犬を連れに来た。

12月16日(水)

朝5時に出発。昨夜小屋の主人に聞いていたので、稜線まで登らずに巻き道を利用でき助かった。1ピッチで水晶山をすぎ、登り下りをして、最後に視界が開けて雁峠がみえてきたので、ジグザグに降りる。正面にはカッコいい、編笠を伏せたような、笠取山がみえる。



笠取山(1953m)



分水嶺の石柱



分水嶺 荒川(北北東)
笛吹川(富士川の支流)(西側)
多摩川(南南東)



笠取山西峰(1941m?)

ここから笠取小屋まで行って、県界稜線の巻道の山腹コースにしようと思ったが、笠取山が目の前に見えていたので登った。下から見えていた登山道を詰めたところが、頂上(西峰)かと思ったが、この奥に笠取山東峰(1953m)があった。稜線を行き、途中から巻道の山腹コースに入ろうとして、少し下り、踏み跡をジグザグに笹の道を詰めていったのだが、また稜線に戻ってしまった。笠取山から3ピッチ半で唐松尾山についた。大きな登りは唐松尾山のみであった。



唐松尾山(2109m)



三等三角点の頂上

やはり奥秩父主脈の縦走ならこの県界稜線を通らなければやったとはいえない。ここから、ゆるやかに2ピッチ半ほど緩やかに下って行くと、将監峠の手前で広場に出て、笠取小屋からの巻き道と合流したのちに、落合からの登山道にも合流する。将堅小屋はここからすぐである。



笠取山・雲取山・将堅小屋の分岐



将堅小屋(左がトイレ)(中間が避難小屋)



バイオトイレ



避難小屋

水はかなりの水量でふんだんに流れている。我々は避難小屋で一泊。小屋は太陽電池で夜も電燈がついている。トイレはバイオできれいで、ドアを開けると電燈がつき快適そのものである。

12月17日(木)

本日は雲取山に登り下山である。行程的には半日遅れで下山予定の石尾根はあきらめた。石尾根を下れば、ほぼ稜線通しに通過してきたので計画通りにできるのだが、時間的に無理なので七ツ石山経由鴨沢コースにした。一日が長くなると思ったので、3時に起床。早めに朝食をすませ4時20分にキャップライトをつけて出発。

昨日の分岐点まで戻らなくても小屋の近くから登山道があった。稜線の下を、このままトラバース気味に登って行く。ところどころ短い距離ではあるがバランスを使うところがある。橋もあった。暗くて景色も見えず、ルートが違っているのではと思ったりした。登りはゆるやかで体は楽である。竜飛山は登らず巻き道にした。竜飛山から下りてくる合流点を過ぎたあたりから、稜線が見え始めた。ルートは相変わらず緩やかな登りで登山道もよい。



霧氷



狼平？



三条ダルミ(竜飛山・三条の湯・雲取山の分岐)

いくつかルートがあるが、近いところを登った。40分で頂上に着いた。

見晴らしも良く、記念撮影、登山者から三角点の講義を聞き、達成感で疲れもしばし忘れる。

雲取山も見え隠れしながらだんだん大きくなっていく。途中で木が白くなったところが現れて、よく見ると霧氷だった。それほど寒いとは思わなかったがきれいだった。

なだらかに上り下りしながら、雲取山を見ながらすこし登り気味に正面に回り込むように行くと、広い場所があり三条ダルミについた。ここから、雲取山への最後の登りが始まる。



頂上直下の雲取山避難小屋



振り返ると登山道の稜線



雲取山頂上(2017m)



大三角点(明治15年測量)の前で

下山は当初の計画を変更して、七ツ石山(1757m)経由鴨沢へ下ることにした。なだらかなよく整備された登山道を下って行くと、奥多摩小屋あたりから登山者に会うようになる。登山道は広く、気持ちよく歩ける。ヘリポートを過ぎ、七ツ石山の手前のブナ坂の手前で右に折れる巻き道があり、疲れた体にはきついブナ坂を登らずにすみホツとする。しかしここからが長い。登りの時は、それほど長いと思えないのに、下山の時は、疲れと早く下山したい気持ちがあるから長く感じるのだろう。途中でキャップライトを出して下った。車道に出た時はうれしかった。近道はこれを通り切っていくのだが、車道通しに降りて行く。車は一台も通らない。暗くて時間がかかり鴨沢はどんな町なのか不安になる。何とか家が見えた時はうれしかった。鴨沢からの最終バスは出てしまったが、食堂のご主人にもう一つのバス停を教えてもらい無事に20時の最終バスにのれた。電車の中でビールと酒を飲んでうちあげた。